

## 露地ミカンの表年対策について

佐賀県果樹試験場 常緑果樹研究担当  
副主査 高須陽介

### はじめに

本年は裏年傾向で、園地や樹による着果のバラツキがみられる中、梅雨前の干ばつや、梅雨明けの遅れとその後の高温乾燥、さらには記録的な豪雨など、極端な気象の変動が樹体生育に及ぼす影響は大きく、品質や収量の低下が心配されます。

そのような中、品質向上対策として、早期マルチの徹底やフィガロン乳剤の散布などに努めてこられたことと思います。

ミカン栽培において収益を安定させるためには、樹勢を維持し隔年結果を是正することが重要です。収穫が終了したら一息つきたいところですが、樹勢回復対策や着花対策など、次年度に向けた対策を行う重要な期間となります。ここでは、露地ミカンの表年対策を中心に今後の管理対応について述べていきます。

### **当面の管理**

#### 1) 適期収穫の徹底

収穫は適期に行えるように計画的に実施します。増糖対策として収穫を遅らせることが考えられますが、冒頭でも述べていますように、今年の気象や生育の状況から樹勢の低下が懸念される中、収穫時期の遅れは更なる樹勢低下を招く可能性があります。適期の収穫を徹底してください。

#### 2) かん水の実施

樹勢低下は収量の減少や隔年結果を助長する恐れがあります。特にマルチ栽培による長期間にわたる水分ストレスの付与は、樹勢低下の大きな要因となりますので、収穫後は早急にマルチを除去してかん水を行い一日でも早く水分ストレスを解除する必要があります。また、過度に土壌が乾燥している場合には、肥料が吸収されにくい状態にあることも考えられます。収穫後、降雨が少ない状況であれば、かん水を実施して水分ストレスを緩和し、肥料成分の効果的な吸収を図ります。

かん水設備がない園地では、樹幹下に灌注を1樹当たり3~4ヶ所、深さ10~15cm、50ℓ程度実施すると効率的にかん水を行うことができます。

### 3) 施肥管理

早生品種以降のマルチ栽培では収穫時期との兼ね合いもあり、施肥が遅れがちになりますが、樹勢を維持し来年産へつなげるためにもできる限りの適期施肥が必要です。まだ秋肥を施用されていない園地では、早急な対応をお願いします。普通温州など収穫が遅い品種では、化成肥料などの速効性肥料が効果的です。

また、樹体栄養の向上を図るために葉面散布も効果的な手段です。尿素 300 倍液を収穫後一週間から 10 日おきに 3 回程度の葉面散布を行うと、葉中窒素を高めることができます。しかし、極端に樹勢が低下した樹に尿素液を散布するとビュウレットの薬害が発生し、逆に落葉等を助長することも考えられます。そのため、極端に樹勢が低下した樹に尿素を葉面散布する場合は、500 倍より薄い濃度か、または、市販の窒素主体の葉面散布剤複数回に分けて使用してください。特に施肥が遅れた場合や完熟マルチ栽培では、樹体栄養を高めるためにも葉面散布を必ず実施しましょう。

### 4) 夏秋梢処理

次年産は、着花過多が予想されます。そこで、来春に少しでも多くの新梢を発生し、隔年結果を是正する方法として、夏秋梢処理が有効です。

剪除する部位によって翌年の新梢の発生の仕方は異なってきますので、夏秋梢の発生状況や充実程度、樹形のバランスに注意しながら行います。

具体的な方法は次の 2 点となります。

①新梢を確保した部分で、比較的強い夏秋梢が発生している場合は、春梢の輪状芽の上で剪除します。輪状芽を残すことで、多数の新梢を発生させ中庸な結果母枝を確保します。

②本年は、夏秋梢の充実が遅れている園地も見受けられます。夏秋梢が充実していない場合は、輪状芽の下から切り返し、強めの新梢を発生させるようにします。

処理は遅くとも年内までに、まとまった部分で行うと効果的です。翌年、着蕾が多い場合は摘蕾を行い、新梢の発生を促すようにします。

### 5) ジベレリン散布による着花抑制

温州ミカンではジベレリン散布による着花抑制が効果的で、着花抑制による樹勢維持を目的に、植物調節剤として登録されています。登録内容については、表1をご参照下さい。

ジベレリン散布を行うことで、着花を抑制し、次年度の結果母枝となる新梢の発生が増加することから貯蔵養分の消耗も抑えることができます。散布時期は、収穫後花芽分化が進むほど着花抑制効果は低くなりますので、収穫後から来年1月までに散布して下さい。果梗枝（着果跡）や夏秋梢の剪除部位を中心に散布すると効果的です。

使用濃度については、従来の25ppm～50ppm単用による方法の他、ジベレリン2.5ppmにマシン油乳剤60～80倍液、または展着剤（温州ミカンのみ）加用による方法が登録されています。本年の生育状況から、ジベレリン25ppm～50ppm単用での使用をお願いします。

表1 ジベレリンの着花抑制の登録内容（温州ミカン）

使用目的	使用濃度 (ppm)	使用液量 (L/10a)	使用時期	使用方法	使用回数
着花抑制による樹勢の維持	25～50	50～250	収穫直後～収穫後約1ヶ月 (苗木11～1月)	立木全面散布又は枝別散布	1回
	10			立木全面散布又は枝別散布 (プロヒドロジャスモン 1,000～2,000倍液に加用)	
	2.5	200～700	11～1月 但し、収穫後 (苗木11～1月)	立木全面散布又は枝別散布 (マシン油乳剤60～80倍液に加用)	

## 6) 冬季の土壌乾燥防止

冬季は地温が低く根の活力が低下するため、水分吸収が少なくなります。従って、寒風や土壌の過度な乾燥は、落葉や枝葉の枯死を助長する場合があります。

旧葉は次年度産の貯蔵養分を蓄積しているため、過度に落葉を起こしてしまうと貯蔵養分が減少し、樹勢低下や隔年結果招いてしまいます。

降雨が少なく、乾燥が続いた場合は、灌水や散水で対応します。特に葉への散水は落葉の防止に効果的ですので、是非実施してください（図1）。

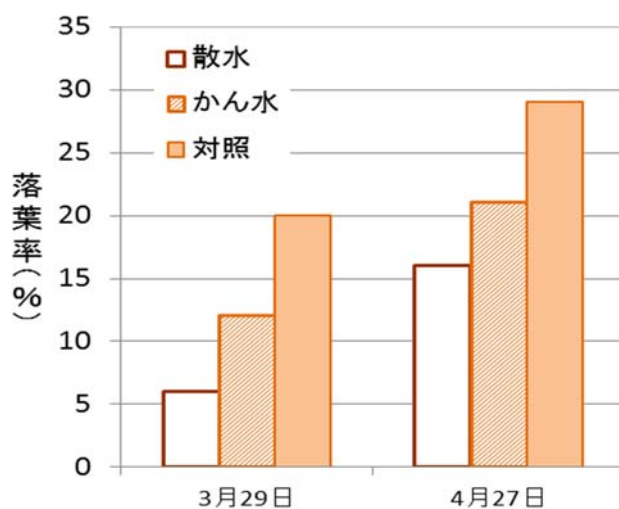


図1 冬季のかん水処理が落葉に及ぼす影響（鈴木ら，1968）

※処理時期：1966年12月～1967年2月

散水処理：1回30mmの水を毎月3回スプリンクラーで葉面散布

かん水処理：1回30mmの水を毎月3回地表面にかん水

## **おわりに**

表年対策としてかん水や夏秋梢処理、ジベレリン散布による着花抑制について述べてきました。高品質安定生産のためには、本稿で述べた対策だけでなく年間を通じた管理が重要となります。適期による適切な管理をお願いします。